

## 発刊によせて

一昨年、当研究所は設立十周年を迎え、本年度は新たな十年へ向けた確かな一歩を踏み出すことが出来た。思い返せば、世界では新型コロナウイルスが猛威をふるい、東京オリンピックも延期になるなど、誰も予想しなかった未曾有の事態に人類は直面することになった。当研究所もコロナ禍にあつて、創意工夫を重ねながら、オンラインによる研究会の実施、動画による研究会の発信など、新しい取り組みにも果敢に挑戦した。

特に注力したのは、これまで部門単位で行つて来た研究活動を集大成し、教育に還元することを目的として開催した部門間対話企画「人間力をめぐる対話―東西の思想から考える『人間力』―」である。第一回は東日本大震災から九年目となる三月十一日に開催し、本学健康社会戦略研究所所長の石井正三先生をゲストに迎えて、「人間とは何か」というテーマについて議論を行った。第二回では作家の村上政彦先生、脳科学者の中野信子先生をゲストに、「人間力を鍛えよう」というテーマについて、闊達な議論が行われた。この部門間対話企画は全三回を予定し、第一回の企画内容は本紀要にも掲載されている。新型コロナウイルスの流行はいつ収束するのか、誰も予想することが出来ない。部門間対話企画を通して見えてきたことは、危機の時代にこそ「人間力」が求められるということだ。部門間対話企画では東洋思想に通底する人の生き方を語り合つた。東洋思想は真理の追究に先立ち、まず人の生き方を教えている。ゆえに、大学教育において人間力を育成するには東洋思想に学ぶことが不可欠である。

東洋思想では困難に直面した時、最も大切なのは「負けない心」であると教えている。仏教では「能忍」、儒学では「不惑」と説かれるように、何事にも動じない心の強さ、言い換えれば「負けない心」が人間力の土台となる。第一回の部門間対話企画では、「心の復興から防災を考える」という項目についても議論が行われた。その中で、どの研究部門も共通して、最後は人間の心のあり方が復興に直結することを強調していた。

先の見えない時代にあつて、死活的に重要なものは何か。それは、政治改革や経済活動の見直しではない。また、過去の反省や道徳の啓発などでもない。もちろん、そうした取り組みが無意味であると主張するものではないが、これらは皆、自分自身の根源的な変革を志向するものではなく、あくまで他律的な考え方である。そうではなく、どんな状況にも振り回されない、真に自律した精神が今、求められているのではないだろうか。具体的には、何があつても「負けない心」の確立ということである。

人間の財産には、金銭的なもの、身体的なもの、精神的なもの、大別してこの三種がある。その中で、精神的な財産、いわば「心の財」が最も大事である。世の中は全て移ろうものだ。そして、金銭や健康は死んだら終わりである。永遠不滅の財産は心の財しかない。「負けない心」という永遠不滅の財産を持った人は、常に希望に溢れている。行き詰まっても行き詰まらない。倒れても倒れない。

「哲学不在の時代」と呼ばれる昨今、科学技術の革新や経済の成長に対して、思想や哲学の価値は軽視されがちであつた。そんな時代にあつて、コロナ禍をきっかけに、人間の原点である心の大切さに気付かされた人も多かったのではないだろうか。

当研究所もコロナ禍をきっかけとして、決意も新たに歩みを進めて参りたい。そして、研究所の使命である建学の精神の深化と教育への還元を目指し、設立二十周年の次なる佳節を見据え、さらなる挑戦を続けていく所存である。

令和三年二月

東日本国際大学  
東洋思想研究所所長

松 岡 幹 夫